

フリーのジャーナリスト安田純平氏は、2015年6月、トルコ南部からシリアに入国したことを知人に伝えた後、消息を絶った。シリア取材中にアルカイダ系の武装組織「ヌスラ戦線」に拘束され、拘束中に何度か氏の映像がインターネット上にアップされた。その安田氏が、3年4ヶ月ぶりに自由の身となって、10月25日夕刻帰国した。健康に問題はなく、一見元気であった。後刻記者会見を行うとのこと。



#### 確認しておく事項

- ① 今回の解放には、日本政府の働き掛けに応じて水面下でトルコとカタールが奔走し、それが功となった。日本政府は無為無策ではなかった。  
カタール政府が身代金（300万ドルとか）を支払ったかどうかは、不明だが、日本政府が支払っていないのは確かなようだ。カタールの狙いは日本に対する期待もあろうが、国際的な名誉・地位や威信の向上か。  
拉致部隊が解放に応じたのは、彼等も弱体化し、追い詰められていたとの背景もあるようだ。
- ② 安田氏は、日本政府がパスポートを没収したり、シリアに渡航しないように制止していたのに対して、「自己責任だから口を出すな」「チキン国家」等と Twitter で呟っていた。氏は韓国パスポートでシリアに渡航した。二重国籍？（事実確認？）
- ③ イスタンブールに向かう機中で、NHK の取材に対し、「日本政府主導の解放は“望まない” 発言をした。これに対し、女性コメンテーターが不快感を表明した。
- ④ 安田氏は、これまでも、中東取材中に数回拘束されている。
- ⑤ 家族への通信暗号で、身代金支払いを拒否するような指示らしきものがあった。

#### 1 安田氏の過去の問題行動や発言を踏まえて、氏に対する批判が炎上

②や③の言動等を探り上げて、自己責任を云いながらも救出を求め、政府や国民に対する感謝或いは謝罪の発言がない等の批判・バッシングがネット上に溢れている。真偽は確認のしようもないが、帰国時に健康そうに見えたこと等から身代金ビジネスに加担した等との論もある。

自己責任論には同意する面もあるが、感情的・批判のための批判に過ぎない、或いは机上・安全地帯にいるが故に言える表層的論とも思える。もう少しジャーナリズムの責任についての理解を持っても良いだろう。

#### 2 主要マスコミは、安田氏の帰国を歓迎してはいるが、自己責任論に対して、特段の反応を示していないようだ。唯一、某局のコメンテーターが自己責任論を強く否定し、英雄として歓迎しないでどうするなどと発言している。

他の識者は、ジャーナリストの責任として真実を国民に伝える義務があり、そのこと

に命をかけているのだとの一般論で擁護しているのみで、直接的に今回の安田純平氏の拉致・帰国そのものを論じていない。歯切れが弱いと感じるのだが、どうか。

- 3 拉致された国民の救出についての国家の責任について、政府の制止を振り切って渡航し危険地帯に入域したのだから、救出責任は国家にはないのか、それともそれでも尚かつ責任があるのかとの論争がある。

原則的には、如何なる場合であっても拉致された国民を救出する責任を国家は負うものである。無限責任がある。が、国家として為しうることは限られている。救出部隊を派遣する訳にもいかない。

- 4 危険地域に入域して真実を報道するのがジャーナリストの使命というのなら、その使命達成のために如何なる準備を実施し、如何なる防護措置・危険回避措置を講じていたのかが問われねばならない。これらの対策を採ったとしても危険を全て回避することは出来ない。そこまでの覚悟があることが重要だ。自己責任を標榜していた氏ならば、相応の準備、現地部族との接触や案内人・ガイドの手配、情報収集等がどうだったのかが明確にならなければ、批判は出来ない。

だが、国家として、国民が危険地域に安易に入域しないように要求することは当然だが、それでも尚且つ入ろうとするものを制止すべきなのだろうか？万全の準備と態勢で入域するのであれば、黙認するしかないのだろう。そのような場合でも拉致される可能性はあり、その場合には国家は可能な限り救出に努力すべきなのだろう。